

---

# 爆弾魔の聖夜

川崎 鉄馬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

爆弾魔の聖夜

### 【Zマーク】

N6987P

### 【作者名】

川崎 鉄馬

### 【あらすじ】

クリスマスの夜に起きた出来事。

俺はボンバーマンが大好きだ。

好きな理由は数え切れないほどあげられるが、やはりそこはなんといつても爆弾をホイホイ投げられる事。今の御時世、というか昔ですら河川敷での花火がためらわれるのだから。爆弾大好きな奴らにとつては世の中狭すぎるとつくづく思うわけだよ。

「故にそんな世の中に終わりを告げるべく、我が友であるところの爆弾魔にして狂人、煎麻<sup>いりま</sup>曝<sup>ばく</sup>は世がクリスマスマつた中の中にもかかわらず、お手製C4爆弾を製作中なのだと」

「そういうコトさー、いやはや、東大志望の令嬢は理解が早くて助かるよ」

せつせつと汗水垂らしながら俺が爆弾をこしらえる横で、ひたすらケーキをむさぼり食つている美人。俺の数少ない友人である（とうよりかコイツだけ）、名を霧崎<sup>きりさき</sup>沙羅<sup>さら</sup>。

社長から社員まで日本人なのに、世界的なシェアを誇る軍事企業の次期跡取りだ。因みに、目下製造中のC4爆弾を使う材料は自分で調達しました。男、煎麻曝。女の手を借りるほど柔に出来ちゃいなイゼ。

「で、どこにコイツを投下するんだ？ やはり人通りで言えば新宿あたりがいいけど」

「あ、お前は怖い奴だな！ そんな事したら死人が出るだろうがつ！」

「…………は？」

「こいつ何て間の抜けた顔してやがるんだ。いや相変わらずの美人なんだけどね。」

「は？ ジヤねえよ。そんなのはただの快樂殺人狂だつ！ 俺はだな、ただ純粹に爆弾を愛で、爆発をこよなく崇拜し、爆風吹き荒ぶのに心躍る草食系男子だ。一緒にされては困る！」

「あ～……じゃあどうしたいの？」

「どうするもこうするも人のいない場所で決まってるだろ？」

「曰とか？」

「マイツ、本当にお馬鹿さんらしいな。思つやいなや、俺は思い切り頭を叩いた。従つて、涙目ジト田の上目使いで睨まれる結果となつたわけだが、美人なのでむしろ田の保養となつた。いや眼福、眼福。

「あのねえ、沙羅ちゃん？ そんなことをすれば山の木々さん達が根絶やしこれ、可愛い小動物君たちが苦しむでしょ？ 頭使おうね」

子供をあやしつけるように頭をなでてやると、すぐにおとなしくなつた。普段クールなぐせに偶にこういふみせてくれるからこまるんだよな。

「……わかつた。なら、今こうぞ爆発させてやる」

……はい？

「え、ちよつ！？ 沙羅さん？ 今何とおつしゃいました？」

「「」うやうやとわけのわからぬ理屈を延々聞くくらいなり、今ここであなたもうとも爆発するわ。……ああ、大好きなバクと一緒に死ねるなんて、サラ嬉しい！」

「まさかのヤンデレ！？ すこません」めんなさい許して下せー！」

「一人ともグチャグチャになつてね、肉と血が重なり合つて一緒くたになるの！」

満面の笑みで非常に瞳に優しいのだけれど、目が完全にイツてますよ沙羅さん。正直言つてヒジョーーノワイヤース。

「つとまあ、冗談はさておいて。実際どうするつもりなの？」

「……いきなり素にもどるなよ、うん。そこでそだなんなんだけど霧崎ビルディングの実験場を、ちょっといと権力行使で貸してくれ

フツ、断る

クツ！今鼻で笑つたぞ。つか人の話は最後で聞けつてんだ。

「いや、何も特殊な兵器実験するわけじゃないんだし、べつによかないか？」

「C4を普通とみなしてるのは十分あなたの思考がよかないことがわかつたわ。というより！あなた、軍事実験場を私用目的で使うつもりなの？」

ふむ、それもそうか。なら、奥の手だ。

「近所の河原を使えないか？」

「なるほど、そこだつたら人払いすればいいだけだな。良い考えだ。

というか、最初に気づけ」

「さて、ギャラリーの少なさには如何ともし難いけどまあ良しとするか。夜だし、爆発にはもつてこいのステージだな」

「私の演出だ。なかなかのモノだろ？ とりあえず私一人で百人分はしゃいでやるから安心しろ」

沙羅よ。それはもはや発狂というのではないか？

ともあれ俺は量産していた爆弾の導火線に火を付けて、投げた。思いつきり願いを込めて。

爆弾は見事に爆発した。そして、彩り鮮やかな色彩が幻想的な空間を演出した。上空で四散した火花は、たがいに体をぶつけ合いながらさまざまな色を生み出していく。水面では爆風が飛沫と波紋を呼び、楽しげに舞い踊る。寿命尽きた花火は、水面へと落下していく、また新しい火花が咲き誇った。

爆弾のすべてが、俺を応援してくれているように見えた。

「……これは、何だ？」

沙羅は面食らつた様子で問い合わせた。そうこなくつちや、話

にならない。

俺は爆弾ハナビから沙羅のまつに体を向き直し、まだ状況が把握できていない瞳をまっすぐに見つめた。改まった雰囲気に沙羅は、柄にもなく動搖している。とはいえ俺のほうも、胸が小型ダイナマイトが爆発してんじやないかと疑つてしまふほどに高鳴つているわけなんだが、沙羅に聞かれていいか心配だ。

俺は、一言だけ、言葉を投げた。

「付き合つてくれ」

沙羅は目を見開き、俯いてしまった。怒らしてしまったかな、なんて思つてよくよくみてみると耳が仄かに赤く染まっている。

「……バカ。よりによつてなんで今日なんだよ」

「クリスマスが記念日になるとか結構ロマンチックだなと思つだけ。いや、我ながらめつさ単純だからさ。俺つてばまったく振られる」と考えてなかつたんだよなあ

言つた後で自分のセリフがやたらと臭いことに気づいて、そっぽを向いた。顔が熱いが、火照つていたりしないだろうか。

しばしの静寂の後、黒々とした水面に、光が乱反射する中でどちらともなく視線が合わさつた。いつになく彼女は、やさしくてやわらかくて穏やかな表情かおをしている。

「……私、ヤキモチ焼きだから。爆弾にばっかり構つてるとそのうち爆死させるわよ」

相変わらず気丈な態度をとる彼女のことがとても可愛く、愛おしく感じられて思わず俺は抱き寄せてしまつていた。一瞬、小さい悲鳴をあげて体を強張らせたけど、時間が経つにつれて徐々に力が抜けていき、終いには彼女のほうからも力強く応えてきた。それから、耳元で好きだと呴いてみた。彼女は黙つたままだつたけれどかすかに頷いたと思つ。

爆弾みたいに衝撃はないけれど、いつまでの瞳の奥に残滓を残すような夜だった。

### (後書き)

以前書いた作品をクリスマス用に改定しました。少々荒いところもありますが、個人的に納得の出来になったつもりです。感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6987p/>

---

爆弾魔の聖夜

2010年12月26日14時25分発行